

時事×思想



浜崎

洋介

戦後民主主義 × 福田恆存

文芸批評家、シェイクスピア翻訳者として知られる福田恒存は、「戦後民主主義」を喧伝した進歩派を批判した論争家でもあった。そのため、革新幻想が瀰漫する1960、70年代には保守反動という汚名を被ることもあった。

が、福田は一貫して「常識」しか語らなかった。福田は常に公と私、現実と理想の区別を重視した。

戦後は様々な偽善がまかり通った。戦争のない状態として消極的にしか定義できない平和という現実に積極的な理想を仮託するという倒錯、または、死にたくないといった生物的エゴイズムを人命は何より重いというヒューマニズムで糊塗するといった欺瞞、そして形式手続きでしかない「民主主義」という現実内容価値としての道徳を見出すことの感傷。福田は、それらの偽善を批判した。

理想と現実が混同された時、政治は価値に殉じる私の

個別性と、事実に処する公の論理とのけじめを失い、次第

識人と政治家によって担われてきた。

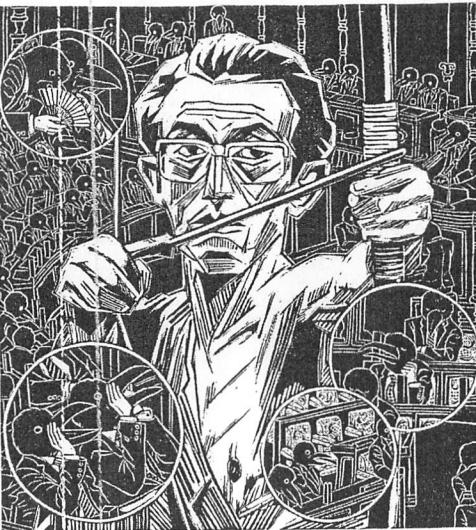
たかが民主主義制度内での消極的選択である「政権交代」を積極的な「革命」だと浮かれ騒ぐマスコミ知識人。「敵」いたのも、耐えるべき妥協を寬容の美德にすり替え、政治という消極的な悪を積極的な善に持ち上げるその心理が、結局は、エゴの複数性に眼を瞑り、見たいものだけを見るユートピア主義の中に政治の限定的責任を霧散させていくという事態だった。

とすれば、福田が危惧した「戦後民主主義」の欺瞞は、戦後65年を経てようやく、民主党政権の中にその実体を現したのだと言える。実際、政権交代をめぐる騒動は、かつて福田が批判した若者たち、つまり心情倫理（理想）と責任倫理（現実）をグチャグチャにして語る全井闘世代の知

ソリン税値下げのマニフェストを破りながら、マニフェスト堅持を大義名分にして権力闘争を繰り返す小沢元幹事長。その一方で、「幻想なき理想主義」（R・ケネディ）を語つて「社会保障と税の一體改革」に取り組む野田首相が、党内から浮き上がり、逆に理念を失ったと批判される皮肉もそこにある。



ふくだ・つねあり(1912~94年) 批評家、劇作家。
東京生まれ。D・H・ロレンスの文学に影響を受け、芥川龍之介論などを展開。三百人劇場を拠点に演劇活動を行う一方、保守論壇人として、「文学と政治」論争、チャタレイ裁判、国語国字論争、安保闘争批判、ベトナム戦争反対運動批判など多く文學・政治論争を繰り広げた。進歩的文化人だけでなく、江藤淳ら保守論客をも批判した。著書に「藝術とはなにか」「人間・この劇的なるもの」など。



画・風間サチコ

これら民主党をめぐるゴタゴタの全てが、現実を理想化する感傷、あるいは政治理念以上の理想を考えられない軽薄さに由来している。そして、それを最もよく示しているのが「国民の生活が第一」という民意中心主義だろう。民意を絶対化する政治は、必ず民意の相対性に復讐される。

当たり的対応に終始するほかない。民意は理想ではない。それは対処すべき現実の条件である。それを理想だと勘違いした時、「この民意も、あの民意も大事」だという「決められない政治」が始まるのだ。

そのかぎりで、民主党政権の教訓は、個々の政策の正しさよりも前に、理想と現実のけじめを問うべきであり、それをなし崩しにして進んだ場

る民意（空氣）に流され、場合、いかに醜惡な現実が出来するのかを見届けられたといふ点につきる。「あれも、これも欲しい」といった空想に自分を甘やかすのではなく、政治が「あれか、これが」という痛々しい欲望の整理の問題であるという事実を腹に入れる。60年安保騒動に際して福田は「常識に還れ」と言つたが、今まさに必要なのは、その「常識」に立つ覚悟ではないか。